

忘れるのがこわい。

忘れないために、あの日を思い起こす。

東日本大震災からちょうど四年の節目をむかえ、このところ新聞やテレビでは多くの特集が組まれました。その中で深く考え込ませる言葉に出会いました。「忘れる」というこの言葉は、一見、直接的に震災を体験していない人からの、風化を案じる発言のように思われます。けれども実際にはまさに渦中にあった、家族を亡くした当事者の方々から発せられた言葉なのです。

あの日を忘れたくない—そこには震災直後の焼け付くような喪失の悲しみと痛みから、年月とともに少しずつ変化していったであろう、その方の思いがうかがえます。あの日を境に全く変わってしまった生活であっても、それでも「日常」は少しずつ人を変えてゆきます。実際に当事者ではないわたしは、四年と言う月日を想像してみることしかできませんが、もう二度と笑うことができなくなった人が、気が付けば微笑みを浮かべている日が来、これからのことを思い描いている時が増えてきたことでしょうか。もちろん、前向きに受け止められる人ばかりではなく、あの日のごことは未だに思い出すのもつらい、深い悲しみや苦しみに閉ざされたままの方もおられるでしょう。

それでも、あの日のご受け止め方は千差万別であるとしても、人間は「今」という時を生きるように招かれているのは確かです。そしてそのように「今」を生きることは、過去を切り離していることではありません。それでも、少しずつ変化していく心の中で、ふと人は不安になるのかもしれませんが。わたしは「あの時」のことを、忘れてしまったのではないだろうか—。

人間の心は不思議です。人間の意識はまるで地層のように、様々なレベルが積み重なっているようです。実際には忘れることなどできない、心の奥底に保ち持ち続けている思いや記憶が確かにあるのに、わたしたちの意識は多くの場合「今」目の前にある現実に向けられています。そうであるからこそ、わたしたちはどれほどの苦しみを経験しても、未来に向かって生きていくことが可能なのです。

そうであるからこそ、「今」を生きるわたしたちは、意識の地層の深くにある「保ち続けている思い」に、心を向けるひと時を必要とします。そこに触れることで、わたしがどのように「今」を生きているかが見つめ直されるのです。「忘れないために、あの日を思い起こす」と語ったその人は、亡くなられたご家族の死を悼むとともに、生かされたことの意味を静かに見つめ続けておられるのかもしれませんが。

思い起こすこと、意識の深くに秘められた大切な体験に触れることは、人間にとって何よりも尊い、今を生きるための道標となり得ます。信仰者にとって思い起こすこととは、神の救いの歴史に触れることを意味しています。歴史的・時間的な意味で直接経験してい

ないにもかかわらず、不思議なことに神の救いの体験は世代を超えて「わたし」の出来事となるのです。そのようにイスラエルの民はエジプトからの解放の記念を、世代にわたって語り伝えました。「イスラエルよ、思い起こせ」という呼びかけは、彼らの存在の根にある神の愛の体験を新たに生きる契機となりました。わたしたちにとってそれはミサにあたります。ミサを通して、わたしはイエスの死と復活を思い起こし、それを不思議な仕方で体験し、生きることが可能となるのです。

